

# 生涯発達をみすえた 社会能力の評価と活用にむけて

あんめ ときえ  
安梅勅江 (筑波大学大学院 人間総合科学研究科教授)

## I. 社会能力とは

### 1. いまなぜ社会能力か？

メディアに流れる事件、社会生活での衝動行動や不適応等の増加にともない、生涯におよぶ社会能力の育ちへの関心が高まっている。子どもから成人まで、社会能力の発達をとらえる評価法の開発と支援への活用は、保育、教育、保健、心理、福祉などに携わる専門職にとって喫緊の課題である。

広義の社会性とは、自分の所属する社会が認める生活習慣、価値規範、行動基準などにしたがう態度や行動がとれる全般的な社会的適応性をさす<sup>1)</sup>。一方、社会能力はやや狭義に社会性や社会的行動をとらえる概念である。対人関係を円滑に進めるための具体的行動、他者との関係や相互作用のために使われる技能、対人関係を結ぶための基礎能力としている。また社会能力は、定型発達により学習可能な行動としている<sup>2)</sup>。

社会能力の獲得の支障や発達の遅れは、その後の社会不適応、学校不適応、学業成績不振、注意欠陥性多動性障害、広汎性発達障害、うつ、社会逸脱行動などの予測因子になるとした報告がある<sup>2)</sup>。

生涯発達をみすえた社会能力の評価と実践への活用は、社会能力の獲得に困難のある子どもと成人に対する早期支援への大きな一助となる。

### 2. 世界動向からみた社会能力の構成要素

社会能力は内容が幅広く多義的であるため、日本では実践場面で社会能力を総合的、客観的に評価できる指標はほとんど見当たらない状況であった。

社会能力の構成要素については、研究者により表現が異なる。Greshamら<sup>3)</sup>は、Social Skills Rating Systems (SSRS) でcooperation、self-control、assertionの3因子をあげているが、Caldarellaら<sup>4)</sup>は、peer relations、compliance、self-management、assertion、academicの5因子をElkskinら<sup>5)</sup>はinterpersonal、teacher-pleasing、self related communication、assertiveness、Kolbら<sup>6)</sup>はpeer & group interaction、problem solving / decision making、self management、communication、assertionの5因子をあげている。しかしいずれも「他者への共感／協調性」「自己制御機能」「意思の明示／自己主張」を軸に置く点で共通してお

り、この3因子に収斂できると考えられる。なお、この3因子構造は日本における乳幼児の大規模コホート研究においても再現性が確認されている<sup>7)</sup>。

### 3. 生涯発達をみすえた社会能力をめぐる研究動向

社会能力の発達は、生得的な個体要因と、養育者をはじめとする家族関係、仲間関係の要因、および社会、文化的環境要因との複雑な相互作用のもとに営まれる<sup>8)</sup>。たとえば発達初期においては、子どもの生得的要因としての気質と、もっとも身近な社会的環境としての養育者のかかわりが互いに作用しあう中で、両者の間にアタッチメント関係が形成される。養育者との安定したアタッチメントは、のちの仲間関係など対人関係のあり方を規定する内的ワーキングモデルとして作用し、コミュニケーションに必要な社会的スキルを育むと考えられている。

初期の養育環境が子どもの発達に重要であるという観点から、養育者のかかわりなど社会的環境の質を測定する指標が数多く開発されてきた。代表的なものとしてHOME (Home Observation for Measurement of the Environment)<sup>9)</sup> や育児環境評価 (Index of Child Care Environment, ICCE)<sup>10)</sup> がある。これらは、子どもの日常的な物理的、社会的な養育環境の質を観察や質問紙により測定するもので、養育者の情緒的言語的応答性、子どもの行動の受容など、養育者の子どもに対する接し方を評定することができる。養育環境評価は、米国における国立子どもの健康と発達研究所 (NICHD) 研究<sup>11,12)</sup> をはじめ国内外の研究で幅広く用いられている。育児環境評価は日本の乳幼児コホート研究<sup>13-15)</sup> で利用されている。また、養育者や教師など成人と子どもの教示場面における相互作用を観察し、成人側の教示のうまさ、かかわりの敏感さを4段階で評定するMLERS (Mediated Learning Experience Rating Scale)<sup>16)</sup> という指標もある。

一方、成人用の社会能力評価指標としてはSSI (Social Skills Inventory)<sup>17)</sup>、日本語版SSI<sup>18)</sup>、ENDCOREs<sup>19)</sup>、ASEBA (Adult Behavior Checklist for Ages 18-59)<sup>20)</sup>、自記式およびパートナーの観察による回答<sup>21)</sup>、WAI (Weinberger Adjustment Inventory)<sup>22)</sup> などがある。ENDCOREsの枠組みは、自己統制 (欲求抑制・感情抑制・道徳観念・期待応諾)、表現力 (言語表現・

身体表現・表情表現・情緒伝達)、解読力(言語理解・身体理解・表情理解・情緒感受)、自己主張(支配性・独立性・柔軟性・論理性)、他者受容(共感性・友好性・譲歩・他者尊重)、関係調整(関係重視・関係維持・意見対立対処・感情対立対処)であり、24項目について7件法で回答を求めるものである。

たとえばNICHD研究で使用されているSSSR<sup>3)</sup>は、子どもの社会的行動を測定する指標であるが、子どもに日常的に接する保護者もしくは教師、または本人による評定であり、評価者が限定される上、客観性が損なわれるおそれがある。

またNCAST Teaching Scale<sup>23)</sup>は、評定者が課題場面における養育者と子ども(0～3歳)を観察し、養育者のかかわりの質と子どもの行動を把握する指標である。しかし米国との文化差から日本では評価しにくい項目が含まれるとともに、子どもの社会能力を養育者との関係性の中で総合的に抽出できるものではない。

## II. 生涯発達をみすえた社会能力の評価法の開発

筆者らの研究チームは、乳児期から成人におよぶ社会能力のさまざまな側面を、生態学的な妥当性を持つ場面設定のもとで、国際的に比較可能な形で精度高く容易に測定可能な方法として「かかわり指標 Interaction Rating Scale (IRS)」を開発した(資料1)<sup>24)</sup>。子どもと養育者の相互作用を日常的な場面設定で簡単に評価し、実践で専門職が気になる子どもと養育者の早期発見、早期支援ツールとして活用できるよう意図した。

評価枠組は、世界的に普遍的な3因子構造、すなわち、「共感/協調性」として<応答性><共感性>、「自己制御機能」として<運動制御><感情制御>、「意思の明示/自己主張」として<主体性>を下位領域として設定した。

「かかわり指標」は、子ども(0～8歳)と養育者を対象とし、子どもの年齢相応よりも多少難しい課題について、養育者がかかわることにより子どもが達成に向けて取り組む場面を設定し、日常的で自然体に近い形での相互作用を評価する。「子ども側面」と「養育者側面」の両側面から10領域についてかかわりの状態を把握する。

### 子ども側

- ①主体性 (Autonomy)：自分から養育者に働きかける
- ②応答性 (Responsiveness)：養育者の動きに明確に反応する

- ③共感性 (Empathy)：不自然な動きがなく、相手の様子に対応して行動する
- ④運動制御 (Motor self regulation)：動きが課題に向けられ、気になる動きがない
- ⑤感情制御 (Emotional self regulation)：自分で感情の制御ができる

### ●資料1 かかわり指標(子ども用) IRS (一部抜粋)

#### 1. 主体性—子ども

子どもが自分から養育者に働きかける。

- ①課題道具を見ながら養育者に向かって発声、もしくは発話をする。
- ②課題遂行中にほほえむ、笑う。
- ③子どもが養育者と自発的に目を合わせようとする。
- ④養育者に対する自己主張がみられる。
- ⑤養育者からの応答を主体的にひきだそうとする。

#### 2. 応答性—子ども

子どもが養育者の動きに明確に反応する。

- ①話の最中に明らかな反応を示す。
- ②養育者が非言語的な行動を示した時、養育者や道具を見る。
- ③養育者が目と目でコンタクトをとろうとした時、子どもが見返す。
- ④養育者の発話後5秒以内に子どもが発声、もしくは発話をする。
- ⑤養育者の態度や接触、表情の変化などの後5秒以内に子どもが発声、もしくは発話をする。

#### 3. 共感性—子ども

子どもに不自然な動きがなく、養育者の行動や状況に即した行動をする。

- ①養育者に視線を向けて、要求ではなく共感を求めて課題道具を見せる、渡す、指さす。
- ②養育者に視線を向けて参照視する。
- ③養育者の発話後5秒以内にその様子に対応した発声または動きがある。
- ④養育者の発話後5秒以内に子どもがほほえむ。
- ⑤養育者の態度や接触、表情の変化の後5秒以内にその様子に対応した動きがある。

#### 4. 運動制御—子ども

子どもの動きが課題に向けられ、気になる動きがない。

- ①課題場面で目を見開き、注意を向ける。
- ②提示された課題に反応して、動きに変化がある。
- ③課題、またはそれ以外のものに子どもが明らかに動きを示す。
- ④課題遂行中に明らかに課題道具に向けて手を動かす。
- ⑤不自然な動きがない。

#### 5. 感情制御—子ども

子どもが自分で感情の制御ができる。

- ①養育者が応答しなくても、自分で気持ちの切り替えをし、立ち直る。
- ②なだめられなくても、自分で気持ちの切り替えをし、立ち直る。
- ③子どもは養育者がなだめて15秒以内に立ち直る。
- ④養育者に助けやなぐさめを求める。
- ⑤養育者が表情や動きを変えた時、過敏な反応をしない。

養育者側

- ①主体性への配慮 (Respect for Autonomy) : 子どもの主体性に配慮したかかわりをする
- ②応答性への配慮 (Respect for Responsiveness) : 子どもの応答性に配慮したかかわりをする
- ③共感性への配慮 (Respect for Empathy) : 子どもの共感性に配慮したかかわりをする
- ④認知発達への配慮 (Respect for Cognitive Development) : 子どもの認知能力発達を促す働きかけをする
- ⑤社会情緒発達への配慮 (Respect for Social-emotional development) : 子どもの社会情緒発達を促す働きかけをする

乳幼児の大規模コホート研究を用い、3因子構造の安定性やその後の問題行動に対する予測的妥当性を確認した<sup>7)</sup>。また基準関連妥当性を検証するため、注意欠陥性多動性障害、広汎性発達障害、知的障害、被虐待児に「かかわり指標」を適用した。その結果、主体性、応答性、共感性、感情制御の低さに特徴がみられ、内的整合性を示すクロンバック  $\alpha$  係数 0.94、敏感度と特異度が十分に高いことを示した<sup>24)</sup>。

さらに、その成人用として「かかわり指標 (成人用) (Interaction Rating Scale for Adult: IRS-A) を開発した (資料2)。これは子ども用「かかわり指標」同様、社会能力の構成要素としてもっとも普及している「自己主張」「協調性」「自己制御」の3側面を、国際的に比較可能な形で精度高く容易に測定可能な行動観察指標である。世界各国の成人用社会性測定尺度を参考に、〈表現力〉〈自己主張〉〈解読力〉〈他者受容〉〈関係調整〉〈自己統制〉の6領域の印象評定と、85項目の行動生起を評価する行動評定を行うものである。

信頼性と妥当性を検証するため、「かかわり指標 (成人用)」を用いた行動学的マーカー、質問紙 (SSI<sup>17)</sup>、ENDCOREs<sup>19)</sup>) を用いた心理学的マーカー、アイカメラを用いた生物学的マーカーとの関連を検討した。対戦ゲーム課題をビデオ録画し、典型的なかかわり場面において発揮される成人の社会能力の特徴を、客観的な行動解析に基づき把握した。

高校生 17 例に対する「かかわり指標 (成人用)」と教員による臨床評定の相関分析の結果、相関係数 0.65 と有意な関連が見られ (図 1)、内的整合性を示す各領域クロンバック  $\alpha$  係数は 0.8 ~ 0.9 であった。また心理学的マーカー、生物学的マーカーとの他者認知を反映した特徴的な関連が見られた。

●資料2 かかわり指標 (成人用) IRS-A (一部抜粋)

1. 表現力: 自分の考えや気持ちをうまく表現する
  - 1 1 自分の考えを言葉でうまく表現する (言語表現)
    - ①課題道具を見ながら相手に向かって発声、もしくは発話をする。
    - ② (相手に対して) 自分の考えを表す発言がある (否定的、肯定的問わず)。
    - ③相手に言葉を用いて助けやなぐさめを求める。
  - 2 2 自分の気持ちをしぐさでうまく表現する (身体表現)
    - ④相手に対してしぐさによる自己表現がみられる。
    - ⑤共感を求めて相手に視線を向ける。
  - 3 3 自分の気持ちを表情でうまく表現する (表情表現)
    - ⑥気持ちの変化を表情によって表現する。
    - ⑦課題中に自然な微笑み、笑顔がみられる。
  - 4 4 自分の感情や心理状態を正しく察してもらう (情緒伝達)
    - ⑧お互いに自発的に目を合わせようとする。
    - ⑨相手からの応答を主体的にひきだそうとする。
    - ⑩相手に視線を向けて参照視する。
2. 自己主張: 自分の意見や立場を相手に受け入れてもらえるように主張する
  - 5 5 会話の主導権を握って話を進める (支配性)
    - ⑫課題遂行中、自ら相手に提案する発言がある。
    - ⑬課題遂行中、自らものごとを決定する発言、しぐさがある。
    - ⑭相手の注意が向いているときに話し合い、遂行し、フィードバックする。
  - 6 6 まわりとは関係なく自分の意見や立場を明らかにする (独立性)
    - ⑮相手に対して自分の考えを述べる。
  - 12 12 課題遂行中、まわりと異なる意見や立場を表示する発言がある。
    - ⑮課題遂行中、まわりと異なる意見や立場を表示するしぐさ、表情がある。
  - 7 7 納得させるために相手に柔軟に対応して話を進める (柔軟性)
    - ⑮言葉による説明と視覚的な提示を行う。
    - ⑮権威的ではなく、説明的な態度を多くとる。
    - ⑮相手の理解に合わせて、言葉を変えて自分の考えを説明する。
  - 8 8 自分の主張を論理的に筋道を立てて説明する (論理性)
    - ⑮課題を遂行する方法や自分の考えを明確な言葉やしぐさで説明する。
    - ⑮課題遂行中、論理的な筋道をたてて自分の主張を説明する。
    - ⑮相手の意見を理解する発言をした上で、自分の意見を言う。

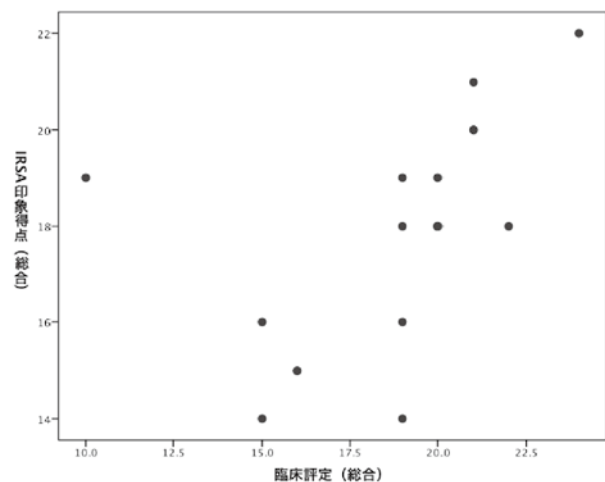


図1: 「かかわり指標 (成人用)」と臨床評定の相関 (相関係数: 0.65)

### Ⅲ. 社会能力評価の活用に向けて

社会能力は環境との相互作用の中で発揮されるものであり、評価の際にはもっとも日常的な社会的環境（発達初期においては養育者）とのやりとりの中で、相手との関係性ととも評価する必要がある。

「かわり指標」を用いた出生コホート研究により、社会能力の発達に関連する要因が明らかになりつつある（図2）<sup>25)</sup>。安全で安心な環境、すなわち世界は安定していて、予測可能であり、居心地の良い場所であるという感覚を持つことが重要である。あたたかさ、思いやり、尊重されているという感覚を一貫して持つことのできる環境が社会能力の発達にポジティブな影響を与えている。豊かで多様性に富み、ほめるなど受容的な環境、「経験の質」が社会能力の発達に影響する可能性が示されている<sup>26)</sup>。望ましい環境は社会・情緒的な発達に大きな効果があり、社会とかかわる動機付けに影響する。その動機付けが、認知的な成長を含め、その他の発達側面にも望ましい効果を与える可能性がある。

「かわり指標」の特徴として下記の6点があげられる<sup>24)</sup>。

#### ①汎用性が高い

日常的な場面設定、短時間（5分程度）、簡単な評価者トレーニングで実施可能

#### ②妥当性・信頼性が明示されている

基準関連妥当性、検査者間信頼性、内的整合性が検証済

#### ③国際比較可能な領域別に数値で評価する

既存研究と比較可能、発達パターン推移分析と気になるパターンの把握が容易

#### ④子ども側面と養育者側面を独立評価、さらに総合的な関連性を把握できる（子ども用）

養育者側面を調整した形で子どもの社会能力の評価可能

#### ⑤実践で専門職が容易に活用できる

相互作用の質評価を、日常的な実践場面で気軽に適用可能

#### ⑥かわりの特徴を測定し、支援に直接結びつけられる

気になる子どもと養育者、成人の早期発見、早期支援システム等への活用可能

「かわり指標」は、社会的な相互作用の質を短時間の行動観察により客観的に測定できるという点にお

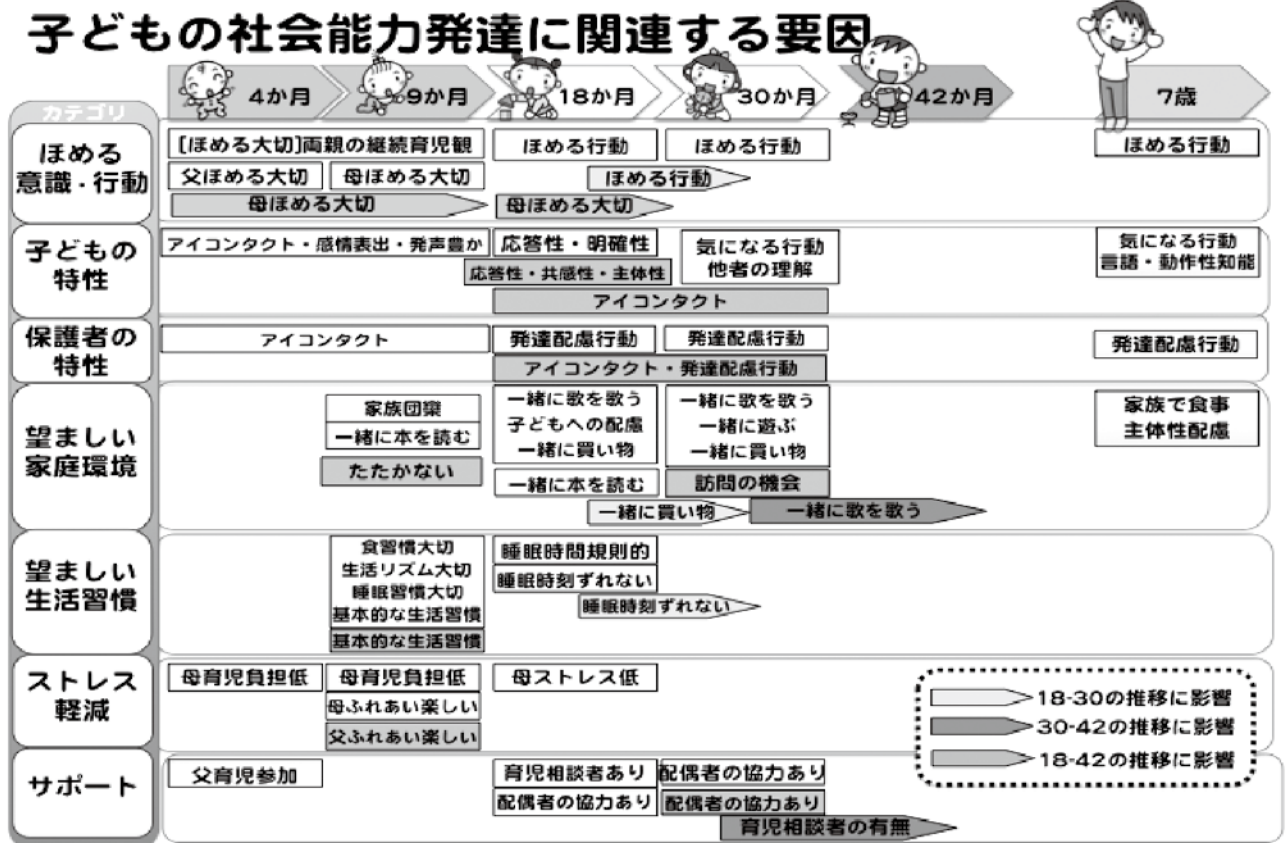


図2：「かわり指標」を用いた社会能力発達に関連する経年的な要因分析

いて、他に類を見ないツールである。

社会能力を発揮し、生涯すこやかに過ごすための環境整備は、社会のもっとも重要な役割の一つである。望ましい環境とは、一人ひとりの力を最大限に引き出し、生き生きとした育ちをはぐくむ「エンパワメント環境」<sup>26)</sup>にほかならない。エンパワメントとは「もっている力を引き出し、最大限に発揮できるようにすること」である。

「かかわり指標」を活用し、今後さらに効果的な支援展開が大いに期待される。

本研究の一部は、文部科学省科学研究費補助金「大規模コホート調査に基づく気になる子どもへの早期支援プログラムの開発研究（課題番号 19330126）」、脳科学研究戦略推進プログラム「社会的行動を支える脳基盤の計測・支援技術の開発」、科学技術振興機構社会技術開発センター計画型研究開発「日本における子供の認知・行動発達に影響を与える要因の解明」の成果である。

#### 〈文献〉

- 1) 繁多進. 社会性の発達とは. 繁多進他編. 社会性の発達心理学. 福村出版, 1991;9-16.
- 2) Gresham FM & Elliott SN. Assessment and classification of children's social skills: A review of methods and issues. *School Psychology Review* 1984; 13: 292-301.
- 3) Gresham FM. & Elliot SN. *Social skills rating system-Secondary*. Circle Pines, MN: American Guidance Service. 1990;1-223.
- 4) Caldarella P. & Merrell KW. Common dimensions of social skills of children and adolescents: A taxonomy of positive behaviors. *School Psychology Review*, 1997;26, 264-278.
- 5) Elkskin LK. & Elikskin N. Teaching social skills to students with learning and behavior problems. *Intervention in School & Clinic*, 1998;33(3), 131-141.
- 6) Kolb SM.& Hanley-Maxwell C. Critical social skills for adolescents with high incidence disabilities: parental perspectives. *Exceptional Children*, 2003;69(2), 163.
- 7) 高橋雄介, 岡田謙介, 星野崇宏, 安梅勅江. 就学前児の社会スキル. *教育心理学研究*. 2008; 56: 81-92.
- 8) 安梅勅江. 子育て環境と子育て支援 - よい長時間保育の見わけかた -. *勤草書房*, 2004 : 1-144.
- 9) Caldwell, B.M. & Bradley, R.H.. *Home Observation for Measurement of the Environment*. Little Rock: Center for Research on Teaching and Learning, University of Arkansas. 2001;1-164.
- 10) Anme T, Segal U. Center-based evening child care: Implications for young children's development. *Early Childhood Education Journal* 2003 ; 30(3) : 137-143.
- 11) NICHD Early Child Care Research Network. Nonmaternal care and family factors in early development: An overview of the NICHD study of early child care. *Journal of Applied Developmental Psychology* 2001 ; 22(5) : 457-492.
- 12) NICHD Early Child Care Research Network. Relations between family predictors and child outcomes: Are they weaker for children in child care? *Developmental Psychology* 1998; 34(5): 1119-1128.
- 13) Anme T, Trajectories of social competence by using Interaction Rating Scale (IRS) as an evidence-based practical index of children's social skills and parenting. *Journal of Epidemiology*, 2010; 20: 419-426.
- 14) Anme T, Gender differences of children's social skills and parenting using Interaction Rating Scale (IRS), *Procedia Social and Behavioural Sciences*, 2010;2: 260-268.
- 15) Anme T, Segal U. Implications for the development of children placed in 11+ hours of center-based care. *Child: care, health and development* 2004 ; 30(4) : 345-352.
- 16) Burchinal MR, Campbell FA, Bryant DM, Warsik BH, Ramey CT. Early Intervention and Mediating Process in Cognitive Performance of Children of Low-Income African American Families. *Child Development* 1997 ; 68(5): 935-954.
- 17) Riggio ER. *Social Skills Inventory Manual 2nd ed. Assessment of Basic Social Skills*. *Journal of Personality and Social Psychology* 1986; 51(3): 649-660.
- 18) 榎野潤. 社会的技能研究の統合的アプローチ (I) - SSI の信頼性と妥当性の検討 -. *人間科学* 1988, 関西大学大学院 ; 31 : 1-16.
- 19) 藤本学, 大坊邦夫. コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の取り組み. *パーソナリティ研究* 2007; 15: 347-361.
- 20) Rescorla LA., Assessment of young children using the Achenbach system of empirically based assessment (ASEBA), *Mental Retardation and Developmental Disabilities Research Reviews* 2005; 11: 226-237.
- 21) Achenbach TM., Becker A., Multicultural assessment of child and adolescent psychopathology with ASEBA and SDQ instruments: research findings, applications, and future directions, *Journal of Child Psychology and Psychiatry* 2005; 49(3): 251-275.
- 22) Daniel A. Weinberger DA. Distress and Restraint as Superordinate Dimensions of Self-Reported Adjustment: A Typological Perspective. *Journal of Personality* 1990; 58(2): 381-417.
- 23) Morriset CE. What the Teaching Scale measures. In: Summer GS, Spietz A, eds. *NCAS: Caregiver/parent-child interaction feeding manual*. Seattle, Wash, USA: University of Washington NCAS Publications. 1994;1-167.
- 24) 安梅勅江. 気になる子どもの早期発見・早期支援 - 「かかわり指標」を用いた根拠に基づく子育て・子育て支援に向けて -. *日本小児医事出版* 2009 : 1-60.
- 25) 安梅勅江. 子育て環境からみた子どもの育ち - コホート研究成果とエンパワメントの必要性 -. *学術の動向*, 2010, 4:28-33
- 26) 安梅勅江. 根拠に基づく子育て・子育て支援 - エンパワメント - 子育て環境評価と虐待予防 -. *日本小児医事出版*, 2009 : 1-96.